

令和6年度  
日章学園  
鹿児島育英館中学校

入学試験問題

国語

(時間 45分)

(注意)

- 1 「始め」の合図があるまで、このページ以外のところを見てはいけません。
- 2 問題は10ページあります。解答用紙は1枚です。
- 3 「始め」の合図があったら、まず解答用紙に受験番号、小学校名と氏名を記入しなさい。
- 4 答えは、必ず解答用紙に記入しなさい。
- 5 印刷がはっきりしなくて読めないときは、だまって手をあげなさい。問題内容や答案作成上の質問は認めません。
- 6 「やめ」の合図があったら、すぐ筆記用具を置き、解答用紙だけをうら返しにして、机の上に置きなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

学校の生徒の中には、試験では一〇〇点満点をとれば**万々歳**、という人がたくさんいる。一〇〇点がとれる人が一番すごくて、七〇点とか六〇点ぐらいではダメだと考える。しかし、それは旧式な考えだ。

日本では一九世紀からつい最近まで、満点のほうが七〇点や六〇点よりいいと、学校も世の中も考えていた。その結果、いつしか**社会は活力を失ってしまった**。満点至上主義に**陥**ったことで、本当に優れた、ものを考える力、判断し、理解する力を持った人がどんどん減ってしまった。

今では大学に行く人の数は昔の何十倍、ひよっとすると百倍を超すかもしれない。毎年たくさんの方が大学生になるのはいいけれども、一方で、ただ試験の点数さえ良ければ大学に合格できてしまうという現状になってしまっている。みなさん、大学に受かるのが優秀な人間なんだと勘違いしている人もいるかもしれないが、考えを改める必要がある。

「満点をとる」とはどういうことだろうか？——私に言わせれば、それは「頭が機械的に優秀である」ということだ。

丸暗記をしたり、わけもわからず全部覚えてしまっていると、たいていの場合は満点になりやすい。それに対し、多少なりとも自分の頭を働かせて理解しようとする頭は、なかなか一〇〇点満点をとることができない。よくても九〇点、だいたいは七〇点から八〇点ぐらいのところである。そういう人たちは、有名な大学や難関の高等学校に入れなかったりする。(1)、その人たちが悪いわけじゃない。今までの社会が、(2) 頭よりも、(3) な知識をありがたがってきたからにすぎない。

もちろん、一〇〇点をとっても構わない。点をとること自体は決して悪いことではない。しかしながら、一〇〇点をとったからといって得意になったりいばったりなんかするのはトンデモないことだ。逆に、五〇点六〇点だからといって恥じたりする必要もない。本来は五〇点六〇点でも充分いい成績なんだから。一〇〇点満点の答案の作成なんてコンピューターに任せておけばいい。人間よりコンピューターのほうが、記憶力はずっとすぐれている。それに引きかえ、七五点の答案を書くというよりは、機械にはできない作業である。

私が教師をしていた時、どうもこのクラスにはカンニングをする者がいるらしい、とにらんだことがあった。そこで、満点の答案は外し、点をいくらか引かれているものの中から、まったく同じ箇所間で違っている答案を探し出すことにした。まるつきり同じ間違いをする答案というのは**元来**、存在しないはず。同じだったらどちらかが他人の解答を丸写ししたのだ。

残念ながら、満点の答案では**そういう証明はできない**。満点の答案の中では誰もが同じことを書くからだ。ところが、まったく同じ箇所

所で二五点引かれるなんていうことは、人間としてはまずあり得ない。その二五点に、その人だけの個性や考えがかくれて存在する。その人なりの生き方や感じ方、その人しか持ちえないいろんなものが入り混じって減点されることになる。(4)、まったく同じところで、同じように点を失うことはまずあり得ない。もしあるとしたら、それこそ必ずカンニング。実際、その答案の主を呼び出してとちめると、スミマセンって言う。

点を失うってこと自体はあんまり良くないことだ。その反面、満点を喜ぶのは幼稚である。もしも、一〇〇点満点をとれないからといって、頭が悪い、と思い込んでいるのなら、いまずぐにその考えを改めたほうがいい。満点をめざして努力するのは結構だが、満点であること自体は大したことではない。

これから社会で立派な仕事をしていくには、そういう一九世紀から引きずってきた古くさい考えを捨て去る必要がある。丸覚えした知識を試験の時に書き連ね、その点数がいいと優秀であると喜ぶのは、もはや単純で、遅れた考え方なのである。

(外山滋比古『何のために「学ぶ」のか』より)

問一 — 線部①「社会は活力を失ってしまった」とあるが、その具体的理由が書かれている箇所を本文中から探し、最初の五字を書き抜きなさい。

問二 (1)と(4)に入る接続詞として最も適切なものを、次のア〜カからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア そして                      イ そのうえ                      ウ だから                      エ たとえば                      オ または                      カ しかし

問三 (2)と(3)に入る言葉として最も適切な言葉を本文中から探し、それぞれ三字で書き抜きなさい。

問四 — 線部②「一〇〇点をとったからといって得意になったりいばったりなんかするのはトンデモないことだ」とあるが、この理由を述べた次の文の空らんには当てはまる言葉を、本文中からそれぞれ八字と十四字で書き抜きなさい。

○ 一〇〇点をとるということは(    八字    )なだけで、(    十四字    )としているわけではないことに繋がるから。

問五 ―線部③「そういう証明」とはどういう証明ですか。説明として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 満点同士の答案を比較し、全く同じ答えのものをを見つけることでカンニングの証明をする。

イ 満点の答案と減点されている答案を比較し、同じ箇所であっているものを探し出しカンニングを証明する。

ウ 同じ箇所が減点され同じ点数の答案を比較し、それぞれの合っている部分を見比べることでカンニングを証明する。

エ 同じ箇所が減点されている答案を比較し、間違いの内容を見比べることでカンニングの証明をする。

問六 ―線部④「まったく同じ箇所で二五点引かれるなんていうことは、人間としてはまずあり得ない」とあるが、その理由を次の

( ) に合う形で答えなさい。

○ 減点される部分には ( )

( ) から。

問七 ―線部⑤「一九世紀から引きずってきた古くさい考え方」とあるが、それはどのような考え方ですか。それがわかる四十字以内の

一文を本文中から探し、初めの五字を書き抜きなさい。

問八 「勉強することが一番大事かどうか」というテーマで、以下の条件に従い、作文を書きなさい。

〔条件〕

① 二段落構成で書き、一段落目は「勉強することが一番大事かどうか」について自分の意見を書き、二段落目にその理由を書きなさい。また、「勉強することが一番ではない」と考える人は、一段落目に「何が一番大事か」を具体的に書き、二段落目にその理由を書きなさい。

② 百六十字以上二百字以内で書きなさい。

③ 原稿用紙の書き方に従い、丁寧な字で書きなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

南小に通う小学五年生のトシユキは、違う学校に転校した三上ケイジと会う約束をした。四か月ぶりの再会をとても楽しみに朝早くから三上くんの住むS市に向かった。しかし、出迎えに三上くんの姿はなく、三上くんの家で三上くんの帰りを待つことになった。三上くんの部屋には南小の時のものは一切なく、部屋に飾ると言っていた転校の時にみんなで撮った記念写真も飾られていなかった。本文はそれに続く場面である。

正午を回った頃、やっと三上くんが帰ってきた。居間でテレビを観ていた少年に、「おーっ、ひさしぶりい！」と笑顔で声をかける。息が荒い。顔が汗びっしょりになっている。自転車をとばして帰ってきた——早く会うために帰ってきれくれた、のだろうか。

① 一瞬ふわっとゆるんだ少年の頬は、三上くんと言葉を交わす間もなく、しぼんだ。

三上くんはおばさんに「お昼ごはん、なんでもいいから、早く食べれるものにして」と言ったのだ。「一時から五組と試合することになったから」

おばさんは台所から顔を出して、「ケイジ、なに言ってるの」と怒った。「トシくんと遊ぶんでしょ？今日は」

三上くんは、あっ、という顔になった。あわてて「わかってるって、そんなのわかってるって」と繰り返したが、<sup>②</sup> あせった目があちこちに動いた。

けろっと忘れていたのだろう。ソフトボールの練習中に急に「試合しよう」という話になって、「じゃあ、俺も行く」と安請け合<sup>やすうけあ</sup>いしてしまったのだろう、どうせ。

「ケイジ、あんたねえ、せっかくトシくんがわざわざ遊びに来てくれたのに、迎えもお母さんに行かせて、ずーっと待ってもらって……もうちょっと考えなさい」

しょんぼりと（ 1 ）を落として「はーい……」と応<sup>こた</sup>える三上くんよりも、少年のほうがつつむく角度は深かった。おばさんが味方についてくれたのが、うれしくて、悔しくて、恥<sup>は</sup>ずかしくて、悲しい。

「どうせジンくんたちでしょ？ さっさと電話して、行けなくなっただけって言っときなさい」

おばさんは三上くんをにらんで、「せっかくハンバーグつくってるんだからね」と、また台所に戻った。ジンくん——少年の知らない、三上くんの新しい友だちだろう。

三上くんは、まいっちゃったなあ、と顔をしかめ、少年に遠慮<sup>えんりょ</sup>がちに声をかけた。

「トシもソフトやらない？ 一緒に行こうよ、学校まですぐだし、グローブも貸してやるから」  
なっ、なっ、と両手で拜まれた。

少年は黙ってうなずいた。おばさんと三人でごはんを食べるのも<sup>※2</sup>気が詰まり<sup>ッ</sup>だったし、三上くんのほんとうの安請け合いは、ソフトボールの試合のことではなく、手紙に「遊びに来るのを楽しみにしています」と書いたことなのかも知れない、と思ったから。

「俺らの学校にトシがいて、五年二組だったら、絶対にレギュラーだよ」

③三上くんは「ほんとだぜ、ほんと」と（2）を押して、にっこり笑った。四カ月ぶりに見る笑顔は、そんなに変わらない。でも、三上くんの「俺らの学校」は、もう、南小ではない。

知らない友だちに囲まれている三上くんは、とても楽しそうだった。「こいつ、トシユキって言って、俺の前の学校の友だち」——少年を紹介すると、友だちは、同じ名前の子を思い出したのだろう。みんなで顔を見合せて笑った。この学校でのトシユキは、どうやらクラスでみそっかす扱いされているようだ。

でも、トシユキがどんな子なのか、誰も教えてくれない。みんなは少年を放っておいて、少年の知らない話ばかりして、笑ったり小突き合ったりしている。

「あ、それで……」

三上くんは少年を振り向き、気まずそうに言った。

④「いま、俺ら九人いるから……トシ、ピンチヒッターでいい？ 途中で、絶対に順番つくってやるから」

泣きたくなった。来るんじゃないと思った、と思った。

「……やっぱり、帰るから」

少年は言った。校門前のバス停から駅行きのバスが出ているのは、さっき確かめておいた。

「ええーっ？ なんで？」と驚く<sup>おどろ</sup>三上くん「バイバイ」と言って、最後にがんばって笑って、ダッシュで校門に向かった。

三上くんは追いかけてこなかった。

次のバスは五分後だった。ベンチに座って、ぼんやりと足元を見つめていると、グラウンドのほうから歓声が聞こえてきて、また目に涙がにじみそうになった。

予定よりもずっと早い列車で帰ることになる。まだ明るいうちに家に帰り着けるだろう。急いで出かければ、南小のグラウンドで遊んでいる友だちにも会えるかもしれない。<sup>⑤</sup>早く帰りたい。みんなと遊びたい。もう「三上、元気かなあ……」なんて言わない。これからは、ずっと。

そろそろだな、と膝<sup>ひざ</sup>に載せていたリュックサックを背負って立ち上がったら、「トシ！」と校門から三上くんが駆<sup>か</sup>けてきた。

「悪い悪い、ごめんなあ……ほんと、ごめん、守備のときは抜けれないから」

一回表の五組の攻撃が終わると、全力疾走<sup>しきそう</sup>してきたのだという。少しでも時間がとれるよう、ふだんは三番の打順も九番に下げてもらった。

「トシのこと忘れてたわけじゃないんだけど、やっぱり、こっちもこっちでいろいろあるから」

「……わかってるから、いいって」

「バスが来るまで一緒にいるから」

「いいよ、そんなの悪いから」

「でも……せっかく来てくれたんだし」

三上くんはグローブを二つ持ってきていた。ボールもあった。「ちょっとだけでも、キャッチボールしよう」と笑って、自分が使っていたグローブを少年に差し出した。

少年が黙って受け取ると、三上くんは照れくさそうに笑った。少年も目を伏せて笑い返す。

小走りに距離をとった三上くんが、山なりのボールを放った。それを軽くキャッチしたときに、気づいた。

〈南小4年1組フォーエバー!〉

グローブの甲に、サインペンで書いてあった。転校したての頃に書いたのだろう。黒い文字は薄れ<sup>うす</sup>かかっていた。

へへッ、と少年は笑う。うれしいのか悲しいのかよくわからなかったが、自然と笑みが浮かんだ。

「なに?」とげげんそうに訊<sup>き</sup>く三上くんにはなにも答えず、ボールを投げ返した。

三上くんが「バス、来たぞ」と言った。振り向くと、道路の先のほうにバスの車体が小さく見えた。

⑥「ラスト一球」——さっきより少し強いボールを、少年は右手をグローブに添<sup>そ</sup>えて捕った。

〈南小4年1組フォーエバー!〉の文字の上を右手の親指でなぞると、うっすらと積もっていた砂埃<sup>ぼろ</sup>が拭<sup>ぬぐ</sup>い取られて、少しだけ、文字が鮮やかになった。

(重松 清「小学五年生」より)

〈語注〉

※1 安請け合い……深く考えずに頼み事を簡単に引き受けること。

※2 気詰まり……気をつかっていたのびのびできない思いをすること。

問一 — 線部①「一瞬ふわっとゆるんだ少年の頬は、三上くんと言葉を交わす間もなく、しぼんだ」とあるが、この時のトシユキの感情の変化として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 安心 ↓ 不安                   イ 喜び ↓ 落ち込み  
ウ 嬉しい ↓ 怒り                   エ 驚き ↓ 悲しみ

問二 — 線部②「あせった目があちこちに動いた」とあるが、三上くんがこのように「あせった」理由を簡潔に答えなさい。

問三 本文中の（ 1 ）（ 2 ）に当てはまる言葉として最も適切なものを、次のア～エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- （ 1 ） ∴ ア 目                   イ 膝<sup>ひざ</sup>                   ウ 腰                   エ 肩  
（ 2 ） ∴ ア 背中                   イ 肩                   ウ 気                   エ 念

問四 — 線部③『三上くんの「俺らの学校」は、もう、南小ではない』とあるが、それはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 三上くんの気持ちは、もう完全に南小から転校先の学校に移ってしまっ、南小への未練は少しも残っていないということ。  
イ 三上くんは転校先の学校で、南小の時よりも友達が多くでき、充実した学校生活を送り満足しているということ。  
ウ 「俺ら」の中心人物だった三上くんが転校したことで、トシユキが「俺らの学校」という表現ができなくなったこと。  
エ 三上くんの言う「俺らの学校」は三上くんがいた時の南小のことであり、今の南小のことではないということ。

問五 — 線部④「泣きたくなかった。来るんじゃないかと思った」とあるが、トシユキがそのように思った理由として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 皆でソフトをすることをすぐく楽しみにして会いに来たのに、三上くん達から仲間外れにされたように感じて悲しくなったから。  
イ 三上くんの新しい友達と仲良くなるチャンスだと思っていたが、関わる時間が思ったよりも短く、仲良くなることができず悲しくなったから。

ウ 三上くんととの再会をとても楽しみに来たのに、雑に扱われることが多く、思い描いた楽しい再会ではなく悲しくなったから。  
エ 三上くんの学校にいる自分と同じ名前の「トシユキ」という生徒が小馬鹿にされていることを知り、自分も同じように小馬鹿にされていると感じ悲しくなったから。

問六 —線部⑤「早く帰りたい。みんなと遊びたい」とあるが、トシユキがそう思った理由として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 自分の相手をしてくれない三上くんを怒りを覚えたので、同じ小学校の友達と遊ぶことで気分転換をしようと思ったから。  
イ 予定より早く帰り着きそうだと分かり、三上くんと遊べなかつた分、同じ小学校の友達と少しでも長く遊びたいと思ったから。  
ウ 三上くんの転校先の学校より、自分が通う南小の方が良い学校だと感じ、早く帰って南小の皆に三上くんの転校先の学校の話をしたくなったから。  
エ 見知らぬ三上くんの友達に囲まれ、楽しみにしていた三上くんととの再会も期待外れで、トシユキ自身が感じた孤独感や悲しみを、気心の知れた同じ小学校の友達と会うことで消したかったから。

問七 —線部⑥「南小4年1組フォーエバー!」の文字の上を右手の親指でなぞると、うっすらと積もっていた砂埃が拭い取られて、少しか、文字が鮮やかになった」とあるが、この表現はどのようなことを表していますか。最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 三上くんの南小や南小のトシユキ達への思いは、転校当初の思いとは違うものの、完全に忘れた訳ではないということ。  
イ 三上くんの南小や南小のトシユキ達への思いは、砂ぼこりにまみれた文字のように、うす汚れてしまっているということ。  
ウ 三上くんの南小や南小のトシユキ達への思いは、完全に忘れ去られていたが、トシユキの手によって思い出されたということ。  
エ 三上くんの南小や南小のトシユキ達への思いは、転校先の学校の友達と同じくらい、色鮮やかに残っているということ。

三 次の問いに答えなさい。

問一 あとの□の中から漢字を二つずつ選び、①～⑥の意味に当てはまる二字熟語を作りなさい。(使わない漢字もあります。)

- ① 役立ててもらおうようにものをさしだすこと。
- ② 病人やけが人の世話をすること。
- ③ 危険をさけるように伝える知らせのこと。
- ④ 物事に対する気持ちが高ぶること。
- ⑤ 足りない部分をおぎなうこと。
- ⑥ 国の一番もとなる決まりのこと。

興	報	足	憲	病	奮	書
看	提	法	読	供	補	警

問二 次の①～⑥の( )に当てはまる言葉として最も適切なものを、ア～エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ① 彼は、父の兄です。つまり、( )。

ア 父と仲が良いです      イ 今は近くに住んでいます      ウ 私のおじです      エ 私の祖父です

- ② 日本には四季がある。( )、近年の異常気象を見ると、その特徴がなくなりつつあるように思う。

ア だが      イ だから      ウ したがって      エ そのうえ

③ この時計は高性能だ。( )、値段が安い。

ア ところで                    イ なぜなら                    ウ だから                    エ しかし

④ 待ち合わせの時間を過ぎた。( ) あの人はまだ姿を見せない。

ア きて                    イ ところが                    ウ また                    エ ところで

⑤ 明日、海に行くかもしれない。あるいは山に( )。

ア 行くだろう                    イ 行けないかもしれない                    ウ 行くかもしれない                    エ 行けるだろう

⑥ 日本の少子高齢化は日本の未来を考える上での大きな問題だ。( ) 国の積極的な対策が重要である。

ア しかし                    イ なぜなら                    ウ 例えば                    エ それゆえ

